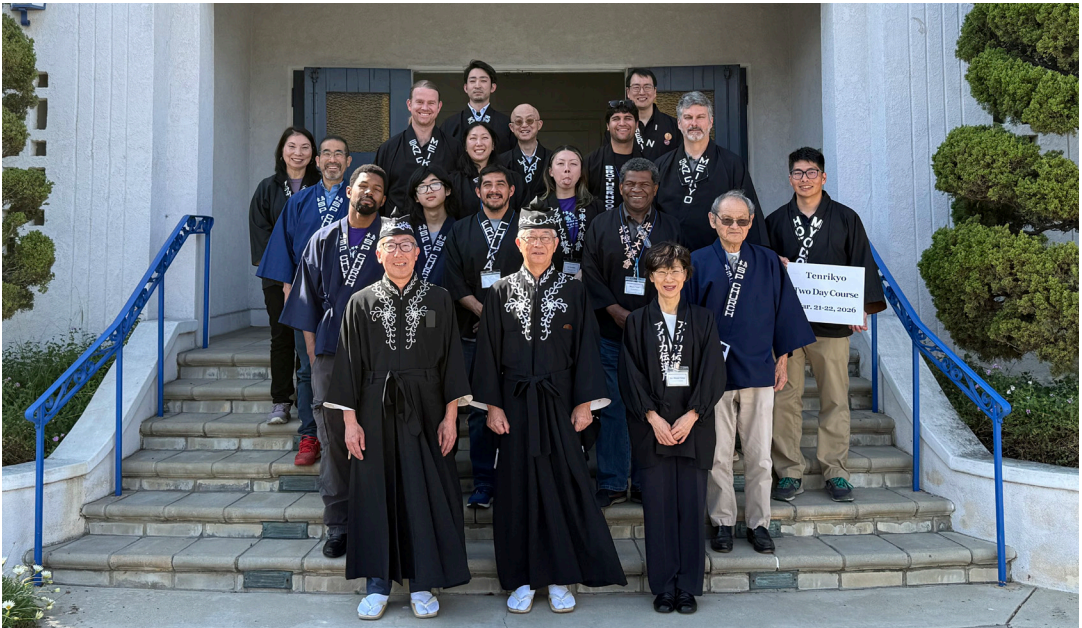


一歩



2 Day Course

去る3月21日～22日にかけて、伝道庁とニューヨークセンターにて2 Day Courseが開催され、あわせて12名の参加者がありました。年齢も背景もさまざまな参加者が集い、和やかな雰囲気の中で、二日間にわたり熱心に教えを学びました。各会場では講話や体験を通して理解を深めるとともに、参加者同士の交流の中で有意義な時間が持たれました。(11頁に詳細記事)

天理教アメリカ伝道庁

No.941



TenrikyoAmericaCanada.org

APRIL

2026



つらつらせんがく 熟々浅学



—「フキハラ」—

4月を迎えました。今月18日は、教祖の228回目のお誕生日です。それぞれの土地所で教祖にお祝い申し上げていただければと思います。

また、今月と来月、管内各地でひのきしんデーが行われます。一人でも多くの方にご参加いただけるようご案内ください。そして、それぞれの地区ののをいがけの一助になることも期待しています。

来月16日、アメリカ婦人会総会が伝道庁で開催されます。一人でも多くの婦人会員にご参加いただきたいと存じます。また、来月23日から25日まで、学生会春季練成会を開催予定ですので、多くの高校生、大学生にお声掛けをお願いします。

そして、アメリカ修養会志願者の締切日は、来月17日となっています。こちらもお声掛けをお願いいたします。

さて、2024年7月号の巻頭言で「マルハラ」という「ハラスメント」について書きました。GoogleのAIによりますと「マルハラ」に関して次のように出てきます。

「マルハラ」とは、「マルハラスメント」の略で、テキストコミュニケーション（メールやチャットなど）において、文末に句点（「。」）を付けることによって、受け手が冷たさや威圧感、怒りを感じてしまうこと。

このような「ハラスメント」があることを初めて知った時は非常に驚きましたが、その後、「フキハラ」と言われる「ハラスメント」があることを知りました。「フキハラ」とは、「不機嫌ハラスメント」の略とのこと。

GoogleのAIには次のように定義されています。「フキハラ」とは、不機嫌ハラスメントの略で、不機嫌な態度や言動を繰り返し、周囲に精神的苦痛を与える行為です。具体的には、ため

息、舌打ち、無視、冷たい態度などが挙げられ、家庭、職場、学校など様々な場面で発生します。モラハラ的一种とされ、周囲に萎縮や不安を与え、コミュニケーション不足や生産性の低下、さらにはメンタルヘルス問題を引き起こすことがあります。

「モラルハラスメント（モラハラ）」の一種とのことなので、「モラハラ」もGoogleのAIで調べますと、次のように書かれてありました。

「モラハラ」とは、モラルハラスメントの略で、物理的な暴力ではなく、道徳や倫理に反する言動によって相手に精神的な苦痛を与える嫌がらせのことです。無視、暴言、見下す態度、人格否定、プライバシーへの干渉などが含まれ、家庭や職場など、様々な人間関係で起こります。

「モラハラ」とは、精神的な苦痛を相手に与えることで、暴力など物理的な行動ではなく、陰湿的な言動の「ハラスメント」のことだと思いますが、そのカテゴリーに入るのが「フキハラ」になるのです。

「フキハラ」も含めて、「ハラスメント」はその場限り、或いは短時間内の出来事の時もあるでしょうが、継続的に起きていることが多いと思うのです。それが人を精神的に病ませ、下手をすると肉体の不調を起こさせる原因になることがあるのです。

この「フキハラ」の定義に私自身を照らし合わせた時に、過去に「フキハラ」をしていた時があったと思いますし、現在でも、不機嫌にならないように気を付けていますが、それでも「虫の居所が悪い」時には自然と「フキハラ」を行っているのだらうと思えます。

「フキハラ」は、自分ではそのようなつもりでなくても、自然のうちに態度に醸し出されて行っている場合もあると思います。人間誰しも、不機嫌な時はありますので、そんな時に「フキハラ」

を行っている可能性があります。思ったように物事が進まなかったり、突発的な外因により計画していたことが急に取り止めになったりすると、不機嫌になるのではないのでしょうか。そのような時に、自然に「舌打ち」していたり、イライラが態度に現れたりして、周囲に悪い雰囲気気を撒き散らし、悪影響を与えていることがあると思うのです。

会社や組織内で上司の機嫌が悪い時があると思います。そのような時、部下は上司に提出しなくてはならないレポートや相談は控えることが多いようです。つまり、機嫌の悪い時に上司に話をしても、良い結果、結論が見出せ難いからだと思うのです。反対に、上司の機嫌の良い時は、物事がスムーズに進むことが多いと思うのです。

私が20代の頃の日本での話です。A先生が東京に出張される時がありました。その時に他の部署のB氏からA先生にある品物を託したいとの話がありました。しかし、その時点では、A先生の出張はまだ公にされていなかったため、下手に尋ねるとA先生から雷が落ちることは明白でしたので、お願いするタイミングが難しかったです。ですから、私はB氏に「私が折を見てお尋ねするから、BさんからA先生に直接お願いしないでくださいね」と釘を刺しておきました。ところが、私が不在時、たまたまB氏がA先生に事務所で出会被われ、その場で託物のことをお願いしてしまったのです。そうするとA先生は「誰から東京に行くことを聞いた！」と怒られて、B氏は私から聞いたことを言ってしまったのです。そうしましたらA先生は、「何処に行った！」と、ちょうど不在であった私を探され、かなりご立腹だったそうです。その時事務所に居合わせた人々は下を向いたまま無言だったそうです。

その後、私が事務所に戻って来た時に、B氏から事の顛末を聞かされました。私は「だから言ったじゃないですか。私からお尋ねするから、それまで待ってくださいって！」と、B氏を詰(なじ)ったのです。しかし、「後の祭り」です。

暫くして、A先生が事務所に戻って来られました。「これは謝るしかない」と思って、A先生の姿が見えた時、直ぐに「すみませんでした」と平謝りしました。幸い時間が経っていたこともあってか、雷は落ちませんでした。

不機嫌を周囲に撒き散らすと、その場の空気が悪くなったように感じて息ができないような気になります。「フキハラ」を行っている本人は気にしていないかもしれませんが、周囲の人々はよい気持ちがないと思うのです。

さて、「フキハラ」の具体的な行為として、無視が含まれていますが、これには子供に対する「ネグレクト」も含まれるのではないのでしょうか。子供が親の気を引こうとして大声を出したり、ちょっとした悪戯をしたりしても、親が無視する行為は「フキハラ」に含まれるのではないのでしょうか。子供の態度が悪かったり、言うことを聞かなかったりした時に、子供に対して冷たい態度を取ることもあるでしょうが、それも「フキハラ」に含まれるように思うのです。

「フキハラ」は、「はらだち」の「ほこり」であるように思います。八つのほこりの説き分けには次のようにあります。

はらだちとは、腹が立つのは気ままからであります。心が澄まぬからであります。人が悪い事を言ったとて腹を立て、誰がどうしたとて腹を立て、自分の主張を通し、相手の言い分に耳を貸そうとしないから、腹が立つのであります。これからは腹を立てず、天の理を立てるようになるがよろしい。短気や癩癪は、自分の徳を落とすだけでなく、命を損なうことがあります。

「フキハラ」が生じないようにするには、心を澄ますこと、天の理を立てることが大切なのでしょう。また、周囲の人々に常々温かい心を掛けていれば「フキハラ」は生じないのかもしれない。

先程も書きましたが、自分自身が気づいていない自然発生の「フキハラ」があるかもしれません。人間誰しも完璧ではありませんから「ほこり」を積んでしまうのですが、なるべく「ほこり」の心遣いをしないようにしたいものです。その点で「フキハラ」は、そのような心遣いに気づかせてくれる行為なのかもしれません。

日々「フキハラ」をしないように気を付けながら、周囲に温かい心を掛けて過ごしたいと思う次第です。

深谷 洋

立教189年3月月次祭祭文

これの神床にお鎮まりくださいます親神天理王命の御前に天理教アメリカ伝道庁長深谷洋慎んで申し上げます。

親神様には、一れつ人間の陽気ぐらしを楽しみに、日夜変わることなく御守護くだされ、日々を結構にお連れ通りいただいておりますことは、誠に勿体なく有難い極みでございます。私共は、朝に夕におつとめを怠ることなくつとめて御礼申し上げ、各々の持ち場立場において、成ってくる理を思案して、たすけ一条の道を勇んで通らせていただいておりますが、その中にも今日の吉日は、当伝道庁の三月月次祭を執り行う由縁の日柄に当たりますので、只今より、おばの理を頂戴して、おつとめ奉仕者一同心を一つに合わせ、陽気に座りづとめ、てをどりをつとめさせていただきます。

御前には、今日の日を楽しみによふぼく、信者一同が参り集い、日頃賜る御厚恩に改めて御礼申し上げ、更なる御守護にお継りしたいと、声高らかにお歌を唱和する状をも御照覧くださいます、親神様にもお勇みくださいますようお願い申し上げます。

昨日は、本年の春季霊祭を滞りなくつとめ終えさせていただくことができまして、誠に有難うございました。これからも霊様方の御功績を礎にして、更なる心の成人に励み、道の伸展に努めたいと存じます。

今月二十一日と二十二日には、当伝道庁にて、また、ニューヨークセンターにて二日講習会の開講予定ですが、無事に開講し、滞りなく終えさせていただきますようお願い申し上げます。

また、来月と再来月には管内各地にてひのきしんデーを開催しますが、各地でのをいがけの一助にもなりますようお願い申し上げます。

私共は、教祖百四十年祭をつとめ終えた時旬に、世界で起きているさまざまな紛争や災害を鑑みて、世界の人々がたすけ合って暮らせるよう、教祖のひながたを頼りに、益々にをいがけ、おたすけに努め、次の塚を目指したいと存じます。また、次代を担う若人たちに御教えを伝えて後世に道を繋げる所存でございます。何卒、親神様には、私共の誠真実の心をお受け取りくださいます、尚も自由自在の御守護を賜り、世界の人々が真実のをやを慕って、感謝と喜びの心に満ち溢れて暮らす陽気ぐらしの世の状に一日でも早く立て替わりますよう、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

3 月月次祭神殿講話

パシフィックバレー教会長
上杉 浩司

人生で困難なことが起こった時、それは親神様の親心にもたれるように、との神様からのメッセージだったとしたらどうでしょうか。

誰もが他人扱いされないような世界とは、どんな世界でしょうか。

少し考えてみてください。

皆様おはようございます！本日は美しい春日和のなか、庁長先生、奥様を芯に、アメリカ伝道庁の3月の月次祭を一手一つに勤めさせていただきました。共に、親神様、教祖からの日々の御守護に感謝し、世界の平和と世界中のきょうだいの無事平穏を祈らせていただきました。皆様方には、真実込めたおつとめをお勤めいただき、ありがとうございます。

本日は、親神様、教祖の御前で、また皆様の前での大変ありがたい月次祭講話のお役をいただきましたので、しばらくの間お付き合いください。

今から二か月も経たない頃のこと、私と娘のハナは、12万人以上の参拝者と共に、また、ここにいらっしゃる多くの方々と共に、全人類のふるさとである親里おぢばに寄り集い、教祖140年祭に参拝させていただきました。1月26日のことで、この日は私たちのお慕いする教祖が、世界一れつをたすけるため、定命を25年縮めて現身を隠された日にあたります。

その日は信じられないほど寒かったです。「コウジ、カリフォルニアの南部から来てたら何でも寒いでしょう」と思われるかもしれません。ごもっともですが、私とハナは準備万端で臨んだつもりでした。サマルシャツを着て、服を何枚も重ね着していました。冬用の温かいジャケットを羽織り、ニット帽を耳の上までかぶり、手袋をつけて、ポケットにカイロを入れて参拝に行きました。

それでもまだ寒さで震えているような次第でした。その寒さと言ったら、息を吐くと白い息が見えて、指はジンジンと痛み、カリフォルニ



ア南部の暖かさを思い焦がれるような寒さでした。私が寒さにどれほど弱いか、お分かりいただけますか。

しかしながら、年祭に参拝させていただきながら思ったことは、教祖はこれよりもひどい寒さのなか、またひどい状況のなかを通られたのだ、ということでした。それは全人類への親心からであり、どれだけ寒くても、どのような状況であっても、感謝の心を持つことを示したい、との思いからでもありました。

教祖や先人の先生方がこのお道を先に進んで下さったおかげで、年祭当日、我々12万人の参拝者は、警察等の脅しや圧力を受けることなく、ありがたくおつとめを勤めることができました。

ここで、1880年代の大和国の冬の真っ只中はどのようなものであったか、思い描いてみましょう。

教祖が80歳代だった頃の話です。80歳です！普通ならゆっくり体を休めたり、寒い冬の間であれば温かい場所で気持ちよく、心穏やかに時間を過ごしたいような年齢であられる教祖を、警察はお屋敷から連れ出していました。それも一度ならず、何度も何度もです。

それは18回ほど続きました。教祖は18回、警察署や監獄に連行されました。サマルシャ

ツもなく、防寒用のジャケットもなく。手袋もカイロもありません。赤衣をお召しになり、ただ、世界一れつの人をたすげたい、とのお心のみを思召しになり、お屋敷を出られていました。

当時の警察が、時には真夜中にお屋敷の門を叩いて入ってくる話をどなたも読んだり聞いたりされたことがあると思います。凍える寒さの1月や、突き刺さるような風の吹く2月に、教祖を連行するのです。教祖は、足元が土でできた牢獄で、暖房もなく、食べるものもほとんどないような場所に拘留されていました。警察は教祖を尋問にかけ、あざけり笑い、身も心もボロボロにしようとしました。

それに対して、教祖はどのような態度を示されたのでしょうか。

教祖はにこやかに過ごされました。決して腹を立てられることなく、優しいお心を示されました。親心をもって応えられました。ある時には、「巡査の来るのは、神が連れて帰るのや。警察へ行くのも、神が連れて行くのや。」(稿本天理教教祖伝逸話篇154話より)とおっしゃったこともあります。

皆さんは、刑務所に連れて行かれたとして、神様のおはたらきと受け取ることができると思いませんか？人生で困難なことが起こったとき、神様の御守護と捉えることが私自身難しく感じる時が度々ありますが、そう受け取ることが教祖が我々にお示し下さった道なのだと思えます。こうして教祖は、このお道を始めて下さったのです。それも教祖お一人で切り開いて下さったのです。

真柱様は、論達第四号でこのことをはっきりと述べられております。「教祖お一人から始まったこの道を、先人はひながたを心の頼りとして懸命に通じ、私たちへとつないで下さった。」と。

そうしてこのお道を始めて下さった時を振り返りながら、今日のことを考えてみてください。ここアメリカ伝道庁の美しい神殿をはじめ、世界中に教会や参拝のできる場所が広がり、迫害される恐怖に怯えることなく、おつとめをすることができています。大変ありがたいことです。

稿本天理教教祖伝逸話篇の第106話「蔭藤」には、明治15年10月29日から12日間、教祖が奈良監獄署に御苦勞下された時の事が記されています。教祖をお慕いする方々は、11キロ(約7マイル)の距離を朝暗い時間から歩いて、毎日教祖に差入物をお届けしていました。後になって釈放され、お屋敷へお帰りになった教祖が毎日熱心に差入物を届けていた梅谷四郎兵衛

に何とおっしゃったと思いますか？教祖は、「四郎兵衛さん、御苦勞やったなあ。お蔭で、ちっともひもじゅうなかったで」と仰せられました。教祖は梅谷四郎兵衛に感謝したのです。監獄で御苦勞され、自分の子供や信者、家から引き離されたのは教祖ご自身であったにも関わらず。自分より先に他の人を立てられた教祖は、梅谷四郎兵衛の真心に感謝の意を述べられたのです。

これが教祖のひながたです。感謝の心を持つだけではなく、感謝の心を表現する方法を身を以て実践するということです。警察からの圧力や絶望的と思われる状況を跳ね返すためにお示し下さった道でした。そしてこれを教祖は先人の先生方にお伝え下さり、その先人方が自身の子供や信者さんに伝えられました。こうして教祖の教えは親から子へ、またその孫へ、そしてまた次の世代へと受け継がれていきました。

このことは、2026年3月現在の我が国において、大事なことです。この講話の初めにあった質問を覚えておられるでしょうか。「人生で困難なことが起こった時、それは親神様の親心にもたれるように、との神様からのメッセージだったとしたらどうでしょうか。」

今の社会の様子を見た時、困難な状況だと言うことができると思います。テレビを見ても携帯に出てくるニュースフィードを見ても出てくるものは何でしょうか？人の分裂です。互いの話を聞かず一方的に自分の言いたいことを言い合っている人の姿。特定のグループの人たちを公平に扱わない多数派のグループの人たち。私たちの真の親である親神様が、これをどのような思いでご覧になられているのか、と考えます。自分の子供たちが、互いのことを家族ではなく他人のように扱っている姿を見る親の気持ちを考えてみてください。

親神様は、大変深い愛情と年限をもって我々人間一人一人をおつくり下さいました。愛する子供たちが互いに背を背けたり、敵対したりしている姿をご覧になって、親神様はさぞ悲しく残念にお思いだろうと思います。これについて論達第四号で真柱様は、「今日、世の中には、他者への思いやりを欠いた自己主張や、利那的行動があふれ、人々は、己が力を過信し、我が身思案に流れ、心の闇路をさまよっている。」と述べられています。

しかしながら、今日見られる姿は今に始まったものではありません。19世紀の日本でも、教祖と先人の先輩方は同じような状況の中にありました。明治政府は、政府の認めた非常に限ら

れた信心の範囲から外れた宗教の信仰を取り締まっていました。政府は、普通の女性の出立ちをした教祖が、天皇や「高山」に位置する人を含む人間誰しもが神様の子供であると説いているのを見て、危険だとみなしました。

この信仰は社会の規律を乱すものだと考えました。そして、教祖を拘留したのでした。教祖の教えを信じる者も拘留されました。おつとめをすること、親神様に拜むこと、人間が皆同じ親の子供であり、きょうだいであることを信じるのがすべて罪とみなされ、そのために収監されました。

どこかで聞いた話と思いませんか？ 2026年現在、どこで生まれたか、何の人種か、どんな話し方をするか、何を信仰しているか等の理由で、この国に属さないと言われている人を目にします。家族が引き裂かれたり、特定のコミュニティが苦しんだり、権威ある者が非道な行動をしていることを目にします。

しかし、親神様は、おふでさきで以下に見られるように、これとは全く違うことをお伝えなっています。

せかいちういちれつわみなきよたいや

たにんとゆうわさらにないぞや 13号43

高山にくらしているもたにそこに

くらしているもをなしたまひい 13号45

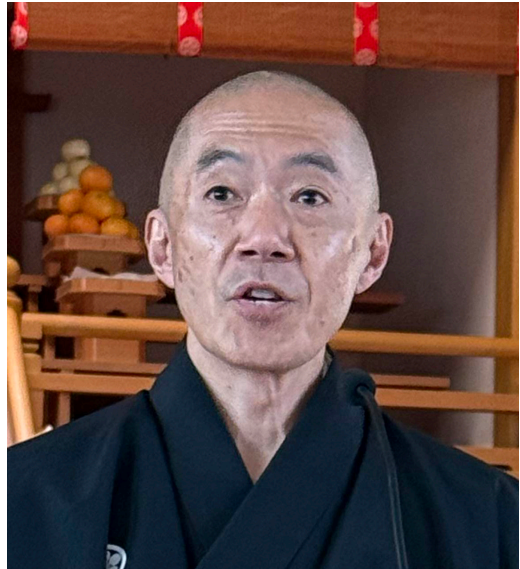
冒頭に、「誰もが他人扱いされないような世界とは、どんな世界でしょうか。」と伺いました。親神様はおふでさきでその答えをはっきりとお示し下さっています。「たにんとゆうわさらにないぞや」、そして「をなしたまひい」であると。

移民も難民も他の言語を話す人も、他の宗教を信仰する人も、自分と違った形で人を愛する人も、どんな人も他人ではないのです。

「せかいちういちれつわみなきよたいや」これは例えや理想を表しているのではなく、真実を示しているのです。

親神様は、私たち人間一人一人をおつくり下さり、命を御守護下さっています。人種、国籍、社会での立場や信仰の分け隔てなく御守護下さっています。我々は皆、人類が陽気ぐらしをする姿を見たい、という親神様の深い情愛と思召しによってこの世に生を預かりました。日々の暮らしの中でいつも考えていることではないかもしれませんが、恐れや誤解に基づいた自分中心的な考え方は、互いを他人扱いしたり、蔑んだりする原因となります。これは、信仰の根源を台無しにしていることに他ありません。

そして、互いに陽気ぐらしをする姿をご覧に



なりたいとお思いの我々の親、親神様に悲しみをもたらすこととなります。教祖はこの真実を強く主張したかったからこそ、監獄でのご苦労を通られました。寒さ、ひもじさ、あざけり、隔離状態の全てを耐え忍ばれたのは、親神様は全ての人に対して情愛を注がれている、ということを示すためでした。高山にいる、権威のある人だけでもなく、見た目や考え方が自分と似た者だけでもなく、全ての人に対してです。

私は日々、自分と違った意見のある人、自分のことを誤解している人を含め皆が親神様の愛する子供なのだという視点で周りの人を見る努力をしています。簡単なことではないです。全くうまくいかない日もあって、情けない限りです。ですが、これこそが教祖がひながたにお示し下さったことであって、日々心がけるように促されたことと信じています。

教祖が1800年代の日本の小さな村でひながたにお示し下さった道を、現在ここロサンゼルスで神様の御用に従事されている方の話と関連付けて話したいと思います。この方の話を聞いたことがある方もいらっしゃるかもしれませんが、

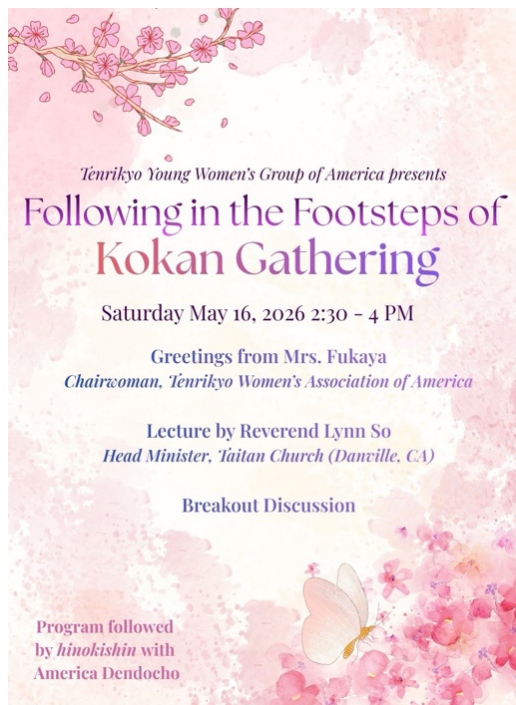
ボイル・グレッグ神父という、イエズス会の神父の方で、ここボイルハイツのドロレス教会の、前の牧師であった方です。グレッグ神父は、ホームボーイ・インダストリーズという世界最大のギャング介入およびリハビリプログラムの

創始者でもあります。グレッグ神父は、自身がロサンゼルス「貧困教区」と呼ぶエリアを40年以上練り歩き、その人たちに教えを説くのではなく、一緒に腰かけたり、食事をしたりすることを通して人々に愛を与えました。

グレッグ神父はこの活動を「kinship（親族関係）」と呼び、「そちら側」「こちら側」といった隔たりを無くすためのものだと言っています。社会から見放された人たちに、「あなた方は私の家族です。ここに属する場所があります。この世に必要な人間なんていません。」と伝えるということを意味しています。グレッグ神父は、愛というものは優しく静かなものではなく、大胆で、力がみなぎっていて、全ての前提となるものであると語っています。グレッグ神父は、「貧しい人が背負っているものに対して畏敬の念を抱き、思いやりを示すことのできる心を求めているのであって、彼らがどのようにそれを背負っているのかの良し悪しを判断することを求めているのではない。」と話しています。

良し悪しの判断ではなく、畏敬の念を払うこと。

グレッグ神父の持つ、全ての人を愛する心は、



Tenrikyo Young Women's Group of America presents

Following in the Footsteps of Kokan Gathering

Saturday May 16, 2026 2:30 - 4 PM

Greetings from Mrs. Fukaya
Chairwoman, Tenrikyo Women's Association of America

Lecture by Reverend Lynn So
Head Minister, Taitan Church (Danville, CA)

Breakout Discussion

Program followed
by *hinokishin* with
America Dendocho

教祖が歩まれた数々の道のなかでお教え下さった姿のあらわれと言えます。稿本天理教教祖伝逸話篇の第195話「御苦労さま」において、以下のような高井直吉先生の懐旧談があります。

「教祖程、へだてのない…方はなかった。…どんな人がお屋敷へ来てても、可愛い我が子供と思うておいでになる。どんな偉い人が来てても、

『御苦労さま。』

物もらいが来てても、

『御苦労さま。』

その御態度なり言葉使いが、少しも変わらない。皆、可愛い我が子と思うておいでになる。」

教祖は誰に対しても見放したり諦められたりすることをなさませんでした。病気が人が訪れると、その人の何が悪かったのかということ説教したりはしませんでした。その人を抱きかかえ、安らぎを与えました。食事の世話をし、体をきれいにしたり、髪を梳いたりしました。

実際に、稿本天理教教祖伝逸話篇の第23話「たちやまいのおたすけ」では、近隣の信者である松村さくが「たちやまい」にかかったのでお屋敷へお願いに伺った話があります。長患いと熱のため、さくの頭髪に虱がわいていました。教祖は、さくの髪を梳いておやりになり、垢付いたさくの身体を綺麗にお洗い下さいました。それは嫌々なされた行動でもなく、同情からでもなく、深い愛情のお心を以てなされたことです。

教祖は、誰をも平等に扱うという概念がない時代のなかで、ぎりぎりのところで生きている人たちを、とてつもなく大きく深い愛情と優しさで包み込みました。教祖にとって、他人や必要のない人は存在しませんでした。1800年代の日本でそうであったように、2026年の我が国でも然りです。

教祖や、他の人に対して深い情愛を示す人を通して分かったことは、道の上でのきょうだい、特に傷ついたりきょうだいを愛するということは、とてつもなく大きな愛情と優しさで以てしてなし得るということです。それは家族に思いをかけるということと同じであって、相手を見放さないということです。これができた時、教祖がお通り下さったひながたの道を自身が歩んでいるということになり、そうすることで親神様の目指す人助けのためのより使いやすい道具となるのです。

人が傷つき、混乱し、存在の意味がないと言われるような世の中で、その人に温もりを与え、「あなたは親神様の大切な子供です。私の兄弟であり、姉妹です。親神様は全ての人に深い親心

をもって見守って下さっています。」と伝えられたら、どんなに良いことでしょうか。

ここで話を少し変えて、あの寒い日のおぢばで私が個人的に娘と一緒に1月26日に経験したことを話したいと思います。非常に有難くほろ苦いような気持ちになる日でした。なぜなら、父の上杉武夫が生きていたら、ここに居たいと思ったであろう場所に私が立っていたからです。

この1月は、父が出直してから10年の区切りの時でした。父の魂が親神様のもとに戻ってから10年が経ったのです。10年前の教祖130年祭のとき、父がどれほどおぢばに帰りたいたっていたかを思い出さずにはいられません。年祭の前月の、父にとっては教会で最後となった講話では、どれだけ病気が悪くてもおぢばに帰りたいたいという切なる願いを語っていました。父は心からそれを願っていましたが、体の状態がそれを許しませんでした。

代わりに、年祭の日には、教会でベッドに横になり、技術の進歩のおかげ、またそれ以上に小山コヨシ奥様とその娘さんのスー・エリカさんの真実と親切心のおかげで、年祭のおつとめの様子をライブストリームで見ることができました。父は5300マイル離れた地におりましたが、携帯電話を通してみかぐらうたを聞き、心で年祭に参拝させていただくことができました。目を閉じ、その魂、その心のすべてをおぢばに注いでいました。

10年後の今、親神様は、その父の孫娘が私の横について、二人で一緒に教祖の年祭におぢばに帰る機会をお与え下さいました。私の両親は私と私の兄弟に教えを伝えてくれました。そして私も自分の娘たちに教えが伝わるように努力し、娘たちがまた自分たちの子やその後続く世代に教えを伝えていってくれるであろうと思っています。

ここに居させてもらっている我々は、先人先輩方の努力に帰するものが非常に大きいです。昨夕の春季靈祭では、大西わきえ奥様が合祀されました。大西奥様は、心優しく一生懸命な妻であり母であり布教師であられました。管内一同で奥様、並びにアメリカの道を開いて下さった先輩方に感謝の意を伝えさせていただきました。我々のお母さんやお父さん、おばあちゃんやおじいちゃん、ひいおばあちゃんやひいおじいちゃん。今よりもずっと困難な道を歩んで下さった方々です。反対が今よりも激しく、周りからの助けも少なかった時を通して下さいまし

た。そんななかでも歩み続け、信仰を続けられ、次世代に伝えていかれた方々です。そのおかげで、私たちは今ここに居ることができるのです。そのおかげで、同じお道の信仰を続けることができています。

真柱様が論達第四号で述べられたことをもう一度読み上げます。「教祖一人から始まったこの道を、先人はひながたを心の頼りとして懸命に通じ、私たちへとつないで下さった。」

そこで、自分に聞きたいこととして、そして皆さんもお考えのことかもしれませんが、「教祖と先人方が残して下さったものをどう大切にすればよいのか。この道と同じだけの情熱で通ることができるのか。」ということです。現在は教祖140年祭の旬の年です。今年一杯、この素晴らしい旬のなかで、信仰を深め、感謝を表現し、ひながたの道を実践する時間があります。

我々の先輩方は、迫害や反対を受けるなかでも、貧しさのなかでも、状況に臆することなく、それ以上の喜びと感謝の心でこの道を繋げられました。2026年がどのような年になろうと、同じ精神でその状況に向き合えると信じています。私が思う教祖140年祭の意味とは、教祖に思いを馳せるだけでなく、教祖がお教え下さった道を実践することだと思っています。それは毎日、何をすることにおいても、誰といても実践することです。

最後に、おふでさきの以下のお歌をもって、この講話を締めくくりたいと思います。

月日にハセカイヂウウハミナワガ子
かはいいゝばいこれが一ちよ 17号16

親神様、教祖にお喜びいただきましょう。先人先輩方を立てさせていただきましょ。この道を感謝、勇氣、情愛をもって歩ませていただきます。そしてこの大切な教えを共に次世代に伝えられるよう、邁進してまいりましょ。本日は私の思いをお聞きいただき、ありがとうございました。





伝道庁連絡



3 月月次祭

祭主 庁長
 祭者 林孝彦 増野大励
 賛者 伊藤光春 伊藤錦平
 指図方 中富淳次郎
 神殿講話 上杉浩司（英）

教会事情

サンフランシスコ教会
 教会ふしんの為、一時的な住所変更(来年八月末まで)
 ジョイアス布教所
 布教所ふしんの為、一時的な住所変更(～夏頃まで)

全教一斉ひのきしんデー

ひのきしんデーを実施された地区の担当者は、実施報告書を伝道庁(担当:増野)までご提出下さい。

修養科スペイン語クラスについて

9月1日から11月27日まで、修養科スペイン語クラスがおぢばにて開講されることになりましたので、お知らせします。日本国査証の必要な志願者は、お早めに伝道庁にお知らせください。

教会長資格検定講習会について

例年9月27日から、5名以上の受講者がいる場合に開講している教会長資格検定講習会英語クラスの日程が変更され、本年より10月27日から開講することになりました。

第86回アメリカ修養会

第86回アメリカ修養会が、2026年6月21日(日)から7月18日(土)まで開講予定です。開講約1ヶ月前(5月17日)までに、英語・日本語クラスは2名以上、スペイン語クラスは5名以上の申し込みがある場合に限り開催予定です。

天理教語学院(TLI)日本語科出願

出願資格

- 12年以上の正規の学校教育を修了していること
 - 日本語能力試験N5資格の所持していること
- 出願に必要な書類として願書と共に日本語能力試験N5の合格証明書が必要となります。
- TLIでは、日本語能力N5以上を有しない出願予定者に対し、出願前の5月から日本語科が提案する教材を用いた自習機会を設け、8月末までに実力認定試験を受験していただく予定です。
 - 実力認定試験の結果、TLIがN5相当の日本語能力があると認定した場合に出願を受理する形とし、出願自体を妨げないように便宜を図る予定です。

願書の配布について:

- 願書は4月25日よりダウンロード配布が開

始されます。同時に、事前学習及び実力認定試験に関する案内も行う予定です。

アメリカれつ会新規扶育生募集

2026年のアメリカれつ会新規扶育生の募集を開始します。対象は、管内教会長、布教所長、出張所長の子弟子女で、大学入学が決まっている方です。扶育を希望される方は、伝道庁に願書を用意しておりますので、ご連絡下さい。願書締切は、6月30日(火)です。新規扶育生は8月伝道庁月次祭時に発表致します。尚、2、3、4年目の扶育生は、願書の提出はありませんが、休学、転校等があった場合、8月31日までに必ず伝道庁までお知らせ下さい。

伝道庁人事

4月1日、瀧本昂郎(たかお)氏(芦津・紀周)が伝道庁青年として着任しました。右写真

4月2日、福田立教(たつ のり)・理香(みちか)夫妻(南紀・神原)が伝道庁青年、女子青年として子供5人と共に着任しました。下写真

2024年4月14日より青年として勤めている林慶信氏(名東)は、2026年5月5日に勤務を終えて帰国予定です。



新任教会長

昨年11月のおはこびをもって、長尾照明さんが、シータック教会の会長に任命されました。奉告祭は12月14日でした。「教会長としての役割を受けするにあたり、身の引き締まる思いと同時に、大きな励ましを感じています。

ここに至るまでの導きと、皆さまからの温かいご支援に、心より感謝申し上げます。これからは、さらに『陽気ぐらし』への歩みを進め、皆さまと力を合わせながら、喜びにあふれ、次の世代へ



と受け継いでいける教会を育てていきたいと願っています。』

その他

4月1日より本部境内掛南支所を閉鎖し、インフォメーションセンターの業務(神殿案内、手荷物預かり、車椅子貸し出し、授乳室など)を境内本所に移行されました。

各会連絡

ふしん委員会

- ・複数の熱心な信者さん方が、バイオトープガーデンや、伝道庁敷地内の草刈りや、スプリングラーの動作を確認し、メンテナンスを行ってくださっています。
- ・ひのもと文庫ラーニングセンター前のスプリングラーの修理を行いました。
- ・ニューロットの電気の配線工事をし、ヒーターや電子レンジなどの電気製品を使用するとブレーカーが落ちるという問題が解決されました。

布教委員会

- ・教会長・布教所長・出張所長による伝道庁月次祭当番をおつとめ頂き、有難うございます。以下に6月までの当番をお知らせ致します。
5月：中富淳次郎、大西太一
6月：北井則子、伊藤錦平

教化育成委員会

- ・Two Day Course
ロサンゼルスとニューヨークを合わせて12名が受講しました。
- ・TSA 春季練成会 5月23日(土)～25日(月)
内容：講義、ワークショップ、ひのきしん
- ・おやさと練成会
アメリカ・ハワイ合同オリエンテーション
5月17日(ZOOM)

広報委員会

- ・各地で活動されている方々の情報を「一れつ・ニュースレター」に掲載し、管内の皆様と共有させていただきまします。つきましては、各教会・布教所・地区、また身の周りの方々の活動情報・写真等の提供をお願い致します。
- ・伝道庁ホームページは、管内の皆様にご活用頂けるように作成し、また常にアップデートを努めております。是非、伝道庁ホームページをご覧頂き、また周りの方々に紹介頂きますようお願い致します。

婦人会

- ・アメリカ婦人会総会
5月16日(土)午前10時 於：伝道庁

記念行事：Family BBQ、Free Raffle
BBQにはご家族、友人、どなたでもご参加下さい！

- ・こかん様に続く会
5月16日(土)午後2時30分
於：ひのもと文庫ラーニングセンター
内容：講話

蘇リン台檀教会長
練り合い

- ・アメリカ婦人会総会、こかん様に続く会の申し込みは右のQRコードから。
・サクラメント地区総会
6月6日(土)午前11時
於：ハイサクラメント教会



アメリカ婦人会総会
2026年5月16日(土)

午前10時 おつとめ 12下り総立ち

式典
・会務報告・本会祝辞・主任挨拶・庁長祝辞・新入会員紹介・会歌斉唱

午後12時 記念行事
FAMILY BBQ
ご家族連れでご参加、美味しいランチをお楽しみ下さい
FREE RAFFLE
チケットブースで、お一人2枚チケットをお受取り下さい

☆豪華景品が当たります☆

少年会

- ・今年の少年会おつとめまなび総会は6月20日(土)に伝道庁にて開催し、前日の19日(金)には少年会練成会を開催します。大勢の参加者をご守護いただけるよう、お声がけをお願いいたします。
- ・こどもおちばがえり・海外少年ひのきしん隊の申込用紙を今月配布しますので、ご帰参の方はご提出ください。
- ・新生児や転入された少年会員がおられましたら、【moto1884@icloud.com】までお知らせ下さい。

青年会

- ・インターナショナルひのきしん隊が2026年7月18～24日の期間で開催されます。是非お声がけをしていただき、興味のある方がおられましたら以下のメールアドレスまでご連絡ください。
seinenkainorthamerica@gmail.com

NYセンター

- ・4/18 少年会鼓笛演奏
フラッシング・メドウ・コロナパークでの桜祭り
- ・4/25 青年会ひのきしん隊@NYセンター(～26)
- ・5/3 ひのきしんデーNY地区活動

2 Day Course

3月21～22日

アメリカ伝道庁では、3月21日～22日にロサンゼルスおよびニューヨークにおいて、2 Day Course が開催されました。今回は、17歳から91歳まで、世代を超えた意欲あふれる12名の方が受講されました。参加者からは、「とても有意義な内容で、天理教の教えを日常生活に生かしていくための大切な一步となった」等の感想が多く寄せられました。

本コースは、天理教の教えをより深く知りたいと願う新しい信者の方々を対象とした入門プログラムです。週末の二日間を通して、親神様、教祖、おつとめ、ひのきしん、感謝の心、そしてたすけ一条について、講話や体験を交えながら学びを深めました。また、共同生活を通して、きょうだいと共に助け合い、陽気ぐらしを目指す心を養うことも大切な学びの一つとなりました。



「理解へと踏み出す、よろこびの一步」

チャド・ミラー



天理教との出会いは、本当に人それぞれだと思います。家族を通して知ったり、海外での経験がきっかけだったり、あるいは「人生の目的って何だろう？」という静かな探求心から始まることもあります。私の場合、時折書物を読み、若い頃からその教えに触れる機会があったことで、関心の種はすでに心に蒔かれていました。しかし、サンディエゴ天理教教会での月次祭への参拝など、定期的に行事に参加するようになったことを通じて、より深く理解したいという願いが、確かな根を張り始めました。好奇心から始まったことが、次第にその信仰とその教えをより深く理解したいという真摯な願

いへと変わっていったのです。八木先生や教会の皆さんに背中を押していただき、二日間の入門講座に参加したことは、自分にとってとても大きな一歩となりました。

講座はとても分かりやすく構成されていて、天理教のはじまりや歴史を丁寧に学ぶことができました。中でも印象的だったのは「おつとめ」について深く学べたことです。これまで日本語の手振りや歌詞を形として行ってきましたが、英語で意味を学び、一つひとつの動きや歌詞の背景を理解することで、これまでの日常的な実践がぐっと意味のあるものになりました。配布された資料もとても役立ち、講座が終わった後も振り返ることができる心強いガイドになっています。

そして何より心に残ったのは、その場に集った皆さんとの一体感でした。近くから来た方もいれば、ユタ州のような遠方から参加された方もいて、皆が「よろこび・感謝・受け入れる心をもって

生きたい」という共通の思いで集まっていました。スタッフの皆さんの誠実さは言葉だけでなく行動からも伝わり、どんな質問や話し合いも、安心してできる雰囲気がありました。ひのきしんの精神が自然と表れていて、この週末は単なる“入門”ではなく、共に歩む時間だったと感じます。

参加者一人ひとりが、天理教への理解を深めると同時に、陽気ぐらしを目指す気持ちを新たに、特に人生の困難なときにこそ大切にしたい「たんのう」の教えを改めて心に刻みました。すべての参加者とスタッフの皆さんに、心からの感謝の気持ちを感じています。

本当に、謙虚な気持ちになれる、そしてよるごびに満ちた体験でした。



「二日間講座に参加して」

ホアキン・ロペス



3月21日と22日、イーストロサンゼルスにある天理教アメリカ伝道庁で行われた「2 Day Course」に、岡崎マーロン先生と奥様の宏子先生にお招きいただき、参加する機会を得ました。

本当に忘れられない、とても素晴らしい体験でした。主催してくださった先生方はもちろん、参加者の皆さんも温かく、心に残る出会いばかりでした。フレズノから来られたマルティンさん、91歳というご高齢ながらこの講座を受けるためだけにラスベガスから運転して参加されたリチャードさん、そしてサンディエゴから来られたチャドさんとも知り合うことができました。

この講座を通して、天理教の教えや、その深い意味について多くのことを学びました。どれも、日々の生活の中で実践でき、より充実した人生を送り、親神様の思し召しに沿って生きていくためのヒントにあふれた内容でした。

今日から私は、「ようきぐらし」——つまり「毎日感謝の気持ちで生きること」——を実践していこうと思います。そうすることで、「地球という神様の身体の中で、幸せに、平和に、そして調和をもって生きる」ことができると思っています。

この「2 Day Course」は、どなたにでもぜひおすすめしたいです。私自身がそうであったように、人生をより豊かにしてくれる大切な学びが、きっと得られると思います。

カナダ西部地区教祖御誕生祭

4月5日

4月5日(日)、グランビル教会において、カナダ西部地区の年中行事である「教祖お誕生祭」が開催されました。

当日は、少年会員19名を含む、合計42名が参加し、和やかで温かな雰囲気の中での開催となりました。

式典では、座りづとめおよび「よろづよ」がとめられ、年少の会員による献花、年長の会員代表による教祖へのお誕生日メッセージが行われました。また、育成会員によるパネルシアター(八つのほこり)や、誓いの言葉、誕生日の歌など、世代を超えて協力し合う姿が見られました。

今年は、会員からの提案を受け、午後のプログラムとしてビンゴ大会も実施され、参加者同士の交流が深まり、終始笑顔あふれるひとときとなり、教祖お誕生祭にふさわしい、よろこびに満ちた一日となりました。



翻訳者養成講座

3月14日

去る3月14日(土)、天理教アメリカ伝道庁において、翻訳者養成講座が開催されました。今回は、オンライン参加1名を含む、計7名が受講しました。

講座では、日本語の基礎力を養うことを目的に、日本語の単語知識を競うしりとりや漢字ゲームを行ったほか、AI翻訳された天理教関係の文章を、人の手でより適切な表現に編集する作業にも取り組みました。参加者は楽しみながらも真剣に課題に向き合い、翻訳に必要な視点や注意点を学ぶ機会となりました。

実際の翻訳の現場では、現在もデジタル化されていない文書を扱う機会が多く、漢字を正確に読み取る力が翻訳者の力量に直結することが少なくありません。今回参加した学生は全員日系二世であり、日本語や日本文化との距離を感じる世代でもあります。本講座が、今後さらに日本語や漢字、そして天理教用語への関心を深め、自主的に学びを進めていくきっかけとなることが、主催者一同の願いでもあります。



ロスアンゼルス婦人会ヤードセール 3月28日

ロスアンゼルス婦人は、3月28日(土)、伝道庁にてヤードセールを開催し、おかげさまで大盛況のうちに終えることができました。品物の寄付や当日のひのきしんに参加くださった皆さまに、心より感謝申し上げます。

今回のヤードセールでは、2,200ドルの売り上げがあり、これはアメリカ団少年会へ寄付されます。また伝道庁の所在するイーストロサンゼルス地域の多くの方々と交流する貴重な機会となりました。また、世代や系統を超えて、教友が一つの目的のもとに力を合わせる行事ともなりました。

当日は、オープン前から行列のできる賑わいで、地域の皆さまが感謝の笑顔とともに品物を手にし、カートや車いばいに積んで帰られる様子が多く見られました。一日でこれほど多くの前向きな成果を生み出した行事は、非常に意義深いものとなりました。



雅楽おとまり会 3月28～29日

去る3月28から29日にかけて、伝道庁にて雅楽おとまり会が開催され、11名の参加がありました。すでに、春秋の霊祭に楽人として奉仕の経験のある参加者もいますが、9月に努められる秋季霊祭での奏楽奉仕を目標に練習を進めました。また今後は月次祭での奉仕も目指して、それぞれがレパートリーを増やし、技術の習得に励んでいます。



TENRIKYO MISSION HEADQUARTERS IN AMERICA
2727 EAST FIRST STREET
LOS ANGELES, CA 90033

NON-PROFIT ORG.

U.S.POSTAGE
PAID

LOS ANGELES, CA
PERMIT NO.30002

CHANGE SERVICE REQUESTED

THE JOYOUS LIFE



TENRIKYO came into existence on October 26, 1838, when God the Parent, Tenri-O-no-Mikoto, became revealed through Oyasama, Miki Nakayama, to save all humankind. God the Parent is the original and true Parent who not only created humankind but has nurtured and protected human beings ever since.

God the Parent created humankind so that by seeing us live the Joyous Life, God could share in our joy. The living of the Joyous Life is, therefore, the purpose of our existence. Since God the Parent is our Parent, we are all God's children, and thus we could realize that we are all brothers and sisters.

“With human beings:the body is a thing lent by God, a thing borrowed.
The mind alone is yours.”
Osashizu:June 1, 1889

We are taught that our bodies are borrowed from God the Parent and only our minds belong to us and, by the proper use of our minds, we will be able to live the Joyous Life.